言の波

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

ふるさとの浜辺で イエスに会おう

仙台教区信徒
山浦玄嗣

子どもの頃、岩手県気仙（けせん）郡にカトリック信者は我が家一軒だけだった。寂しい越喜来（おっきらい）村の浜辺で父のいない家は更にも寂しかった。竹を編んだ小舞（こまい）に赤土を塗っただけの荒壁と杉皮を葺いて石で押さえた粗末な屋根の貧しい家で私は育った。村人は陽気で親切だったが、かつての用語で言うところの国賊ヤソには冷たかった。道を歩けば馬糞が飛んできた。父の墓の十字架は焼かれ、そこに牛や山羊が繋がれていつも糞だらけだった。

教会ははるかに遠く、熊よけの空き缶を鳴らしながら何時間も歩いて峠を越え、隣町の停車場から汽車に乗って辿り着く、宮城県の気仙沼（けせんぬま）という町まで、年に一度、往復三日がかりの旅の行く手だった。

死んだ父から教わった長崎キリシタンの歌**「沖に見ゆるはパッパの船よ、丸にやの字の帆が見ゆる」**を口ずさんで、一年に一度か二度巡回に来られる神父様を待ちわびた。でも私は知っていた。知る人は誰もいないのに、私のイエス様は確かに村人の中に住んでいた。

民謡を歌いながら海岸の松林の中を馬に乗って通り過ぎた髭面の男の輝くような笑顔は、確かにイエス様のものだった。浜辺で地引き網を引く岩のようにごつい男は、ペトロだった。肥った赤ら顔の網元の旦那は、ゼベダイ親方だったし、川で洗濯をしているひっつめ髪の大工の女房殿は、マリア様なのだ。そして彼らは皆、陽気に気仙の言葉、ケセン語を話していた。亡き父が話してくれた福音書の世界は幼い子どもにとっては目の前のことだったのだ。

私は友達になんとかしてイエス様のことを伝えたかった。でも、そんな夢のような話に耳を貸す者もなく、聖書も公教要理の本も越喜来村の村童にとっては外国語と同じだった。**何とかして、我々の間に住んでいる私のイエス様のことを仲間に伝えたい。**イエス様も話しているケセン語で気仙の仲間に伝えたい。幼い時からの夢は、老いて白髪となったこの身に今もなお燃えている。

長じて私は医者になり、青春時代を学究として東北大学に送ったが、思うところあって大学を辞し、今は故郷気仙に開業医として暮らしている。人々の病を癒す仕事にこの身を捧げつつ、人々の心にイエス様の心を伝えたいと、余暇のすべてを費やしてケセン語の研究に没頭し、これに文字を与え、文法体系を整備し、辞書を作った。こうして二十五年の準備の後、やっと福音をケセン語で記すペンを手に入れた。

だが、我々が持っている日本語の聖書はとてもそのままではケセン語にならない。教会用語は、世間様に通用する日本語からあまりにもかけ離れている。これではイエス様の心がふるさとの仲間に伝わらないのは当然だと思った。**原典から翻訳しよう。**習ったこともない古代ギリシャ語との格闘が始まった。

四つのケセン語訳福音書が完成して、私はふるさとの仲間と共にバチカンへ行き、教皇ヨハネ・パウロ二世にそれを献呈する恵みをいただいた。

今、駅前の公民館で一般市民とともに「ケセン語訳聖書を楽しむ会」を月一度開いていて、もう二年目になる。

世間様に通じる言葉で福音書を読むと、今まで見えていなかったイエスの心がとてもよくわかる。いつも新たな発見がある。それで常連が定着し、片道二・三時間もかかる遠方から来る人もあって、会はとても楽しい。

ふるさとの浜辺で、生身のイエスに出会う。人間臭い活き活きとしたヤソ殿が息せききって私たちのところに駆け寄って、分厚くごつい手で私たちの肩をがっちりと掴み、「おお、俺をわかってくれたか！」と朗らかに笑う。

そんなイエスが日本中のふるさとを元気に走り回る日を夢見る。その日を招くのは私たちだ。

（仙台教区・大船渡教会所属・医師）

Q&A

「聖書ふるさと化」推進

Q．わたしたち一般信徒にとっては、とても難しいけれども、ただただありがたい聖書を、一つの地方の方言に訳された方がいると聞きましたが、本当ですか。

A．一面にその方の文章が載っておりますので、じっくりと読んでいただきたいものです。聖書と言っても旧・新約聖書のすべてではなく、新約聖書の福音書の部分についてだけですが、去る5月5日にカトリック・センターで講演会が催されて、聴衆の皆さんは改めて、聖書のいのちに満ちた力強さに圧倒されたものです。

方言というと、田舎くさいことばということで、教養のないしるしとして見下げられる雰囲気で使われる傾向にありました。ふるさと訛りは恥ずべきものであるかのようにみなされていたと思います。

いまでは標準語とは言わず共通語、といい方言も地方語と言い換えられつつあるようですが、ふるさとの言葉には単なることばではない、その土地の人々の生活といのちに関わるすべてが含まれているので、生き生きと感じることができるのだと思います。

その見直し運動が起こりつつあるわけです。それは日本の社会が貨幣価値社会に単純化され、ことばもふるさとを離れたところで標準化されて、いのちの味わいを失っているのと、無関係ではないのではないでしょうか。

Q．方言はその地方にだけしか通用しないわけですので、聖書を方言でというわけにはいかないのではないでしょうか。

A．日本の共通語は東京語がその基にあるようです。

その共通語の世界に住んでいた一人の歌人がいのちの渇きを覚えたのか、有名な短歌を残しています。

ふるさとの　訛りなつかし　停車場の
人ごみの中に　そを聞きに行く
（石川啄木）

共通語の世界で暮らしていたら、生活の表面では、便利で一定の生活水準を保つことができたでしょう。しかしそんな生活の中で次第に魂の奥を満たす潤いが喪失していくことに、かれは気づいたのではないでしょうか。

共通語は広く人々に通じることばです。しかしともすると、表面を通りすぎて、平板になっていく危険を含み持っているとも言えます。

方言はなるほど多くの人に通じるというわけではありません。しかし、その方言が通用する場においては、単なることばだけではなく、その地方の大気の香り、歴史の深み、そこに住む人々の人格の発露を含んでいます。ですから、その土地の小さな共同体を生き生きと活性化させるための分かち合いに、大いに役立つことばということになりましょう。

Q．聖書を方言で読むということと、いま長崎

教区で進めようとしている「みことば（聖書）の分かち合い」と何か関係があるのでしょうか。

A．これほど深く関わり合うものはないと思います。

分かち合いと聖書研究の違いということで言えば、聖書研究は、聖書についての諸々の事柄に向かい合うことであるのに対して、分かち合いは聖書を通して、互いの人格に向かい合うことです。

かつて弟子たちがガリラヤ湖畔での生活の真っただ中で、互いに通じる方言丸出しで、イエスさまと語らい、生き生きとした自分たちの共同の生活を営み、神さまのいのちをたっぷり含んだふるさとをつくり上げたようなことを、いま自分の住む現実の場に再現しようという試み、これが分かち合いの目指すところです。

山浦玄嗣氏はそんな世界を東北の一角ケセン地方に創ろうとしておられるわけです。

Q．一昔前までの主任神父様方は、派遣された土地のことばで話しながら、その土地の人になり切って司牧に打ち込んでおられたと聞いています。しかし、いま土地のことばが失われ、共通語化していく流れの中では、聖書をふるさと化していく試みは難しいのではないでしょうか。

A．確かに時代に逆行しているようにも見えます。しかし、よく目を凝らしてみれば、いのちが枯渇していくかに見えるこの日本で、わたしたち日本人のいのちのふるさとからその復活を模索する動きが現われてきていることも確かです。

日本の国会においても「家族の日」の制定をねらった「家族・地域の再生プラン」についての議論が始まっています。

長崎出身で、京都大学で研究に従事した崎谷満博士が追いかけているテーマも同じ方向にあるようです。博士は人間のいのちの設計図ともいうべき、DNA・RNAの研究の権威であると同時に、日本人のいのちの原点に迫る研究を進めておられる、日本でも希有なスケールの大きい学者です。

何はともあれ、博士の長崎語による福音の一節の、みずみずしい試訳の一部を紹介します。

マタイ福音書26章73節から75節。いわゆる「ペトロの裏切り」の場面です。

〈26・73〉ちょっとばっかし経って、そこにつっ立っとっ人達の近う寄って来てペトロに言うた。「ほんなこと、わいもあい達と一緒ん仲間たい。わいのしゃべくりで、わいがだいか、どげんもんにもばれとっやっか！」

〈26・74〉そん時ペトロは呪い始めて、誓うて言うた。「こげん人んごとあっと、いっちょん知らんばい！」したら、すぐニワトリの鳴いた。

〈26・75〉そいでペトロはイエズス様の言いなった言葉ば思いついた。「あんたはニワトリの鳴く前に、三べん、私ば知らんて言うてうっちょくやろだい。」そいけん、ペトロは外に出て行って、ものっすごうつろう泣いた。

ちなみに共通語は、次のようになります。

〈26・73〉しばらくして、そこにいた人々が近寄って来てペトロに言った。「確かに、お前もあの連中の仲間だ。言葉遣いでそれが分かる。」

〈26・74〉そのとき、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「そんな人は知らない」と誓い始めた。するとすぐ、鶏が鳴いた。

〈26・75〉ペトロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。

「言（ことば）は神であった」（ヨハネ1・1）とヨハネ福音記者は記しています。「みことば」が身について、それこそ「身ことば」となり「言の波」となって、自分の内と外に広がっていくような試みを進めていきたいものです。

新しい要理「共に歩む旅」（1）

「共に歩む旅」とは何か

第二バチカン公会議以降「要理教育」についても刷新が行われ、その考え方を集約したものが教皇ヨハネ・パウロ二世の使徒的勧告「要理教育」です。この日本語版が1980年に故里脇浅次郎枢機卿の訳で発行され、2002年には、改訂版がカトリック中央協議会から発行されています。

「要理」ということばを聞くと、まず思い浮かぶのは、子どもの要理であり、求道者の要理だと思います。それはカトリック教会伝統の問答形式の要理書であり、その指導者は、聖職者を代表とするカテキスタや要理教育の専門教育を受けた信徒のカテキスタが教えるという、いわば「注入方式」と呼ばれるものです。

最近、カトリック新聞やカトリック書店などで要理教育の新しい方法として「α（アルファー）コース」とか「グリフィン講座」などという現代にマッチした方法が紹介されていますが、今回のシリーズでは、アジア司教協議会連盟のAsIPA（アシパ）プログラムのなかで推奨されている「共に歩む旅」という要理の内容と方法について紹介したいと思います。これを求道者の要理教育や、堅信以降の成人の信仰養成に役立てていただければ幸いです。

1．「共に歩む旅」とは

▼ 名前の由来は・・・

「共に歩む旅」とは「Our Journey Together」という原本の表題を訳したものです。このイメージは、イエスが十字架にかかって亡くなられた後、二人の弟子がエマオへ行く途中に復活されたイエスが同伴して、いろいろ教えてくださった場面や、イスラエルの民がエジプトからカナアンの地に旅する場面からもきています。すなわち、信仰を同じくする民が、老いも若きも互いに教え、支え合いながら信仰の旅を続けるということなのです。

浦上四番崩れで日本各地に流配された私たちの信仰の先輩たちは、それを「旅」と呼びましたが、この要理のタイトルは、私たち長崎教区にある者にとっては、ふさわしいもののように思えます。

▼ 対象者は・・・

この要理の対象者は、まず「求道者」であり、第二に私たち「堅信以降の信者」です。

▼ 特徴は・・・

①神（イエス）が同伴者である

この要理の主人公は、復活したイエス、あるいは聖霊または神という考えかたに基づいています。エマオへの旅の途中いろいろ教えてくださったのは復活したイエスであり、エジプト脱出の旅でイスラエルの民をいろいろな形で教え導いたのは神であったように、この要理で教え導いてくださるのはカテキスタではなく神（イエス）ご自身であるという考えです。

②聖伝と聖書が源泉である

要理教育の源泉は「聖伝」と「聖書」であると教会は教えています（要理教育27項）。これまで私たちが要理の源泉としていたものは、どちらかというと聖伝でした。聖書はその聖伝を補強するために使用されたといってもいいかもしれません。しかし、この要理では、聖書により積極的に目を向け、みことばに照らして人生を見つめ、神の国の実現に向かって歩みを進めようというものです。

③求道者共同体を構成する

この要理に参加するのは、求道者であり、このグループを世話する進行係です。また、求道者を教会につれてきた紹介者（この人は将来求道者の代父母になります）であり、求道者の近くに住む信徒

たちです。これらの人々は求道者共同体を構成して、ともに信仰の旅を歩むのです。

④分かち合い方式で行う

この要理では、要理の専門家が教えるというやり方ではなく、参加者が神の前で、同じ立場で、各自が経験したことや感じたことなどを分かち合いながら進めていきます。進行係はテキストに記載されたとおり進行していくのみで、参加者と同じように分かち合いに参加していきます。

また、神は人間を創造され、すべての人を天の国へ導こうとされています。したがって、洗礼を受けた人のみに恵みを与えられたのでなく、まだ洗礼を受けていない人にもそれぞれのタレントやすばらしい人生の経験を与えてくださっているのです。そこで、この求道者共同体の中では、洗礼を受けた人も、洗礼をまだ受けていない人も、共に貴重な人生体験を分かち合いながら、学び合いを進めていくのです。

⑤地区集会にも参加する

求道者はこの求道者共同体に入ったら、できるだけ早く近所の地区（班）集会に参加するようにします。これまで洗礼を受けてから地区集会に参加するというケースがほとんどでしたが、求道者の段階から参加するようにと要理教育24項で強く勧められています。

2．「共に歩む旅」の進め方

一回の集まりには一つのテーマがあり、それを基にして、次のように順を追って進めていきます。

A．わたしたちの生活

この部分では、わたしたちが日頃遭遇するテーマに沿った物語や絵を見て、それについてどう感じるか、何が原因と考えるか、どうすればよいか、といったことについて分かち合います。

B．神のことば

テーマに沿った聖書の箇所を読み、じっくり味わい、感じたことについて分かち合います。

C．さらに一歩進んで旅を続けよう

AとBから、今後の生活にどのように応用していけばよいかについて話し合います。

D．覚えていこう

テーマについて、問答形式の質問と回答を講座のまとめとして使います。

この要理の始めと終わりには、参加者が自由に祈りをします。

3．従来の要理との比較

この下の表は、従来の要理の専門教育を受けたカテキスタが学校の教室のように生徒に教えるという方法と、求道者共同体参加者が皆で教え支え合うという両方を、少し際立たせる形で比較したものです。後者は、これまで不足しがちだった信仰と生活の一致が図られるという特徴があり、洗礼後の教会離れが少ないと評価されています。

この要理方式を生かすには、不足しがちな理論面を補うことが必要です。たとえば、同じテーマで理論的な説明をおこなってから、この方式に移る。あるいは、月三回の集まりの中で、一回は理論面の説明をするなど。

従来の要理	共に歩む旅
カテキスタが教える	進行係は世話をするのみ
頭で理解する	信じて実行する
一方的	自分も参加し発言する
信仰と生活が遊離の危険	信仰と生活が一致
教理（知識偏重）	福音（全人格形成）
受洗後、孤立、さびしい	受洗後、共同体の中で交わり
理路整然としている	理論面の補強が必要

テキストの紹介

＊**「共に歩む旅」**（サンパウロ出版）
原本を翻訳したもので、2年間コースを前提としている。

＊**「共にする旅程」**（教区本部）
ソウル版を翻訳したもので、6ケ月コースを前提としている。

〈シリーズ〉共に生きる信仰

日本の教会の現状、課題、展望（3）

溝部　脩　高松教区司教

4. 現代的考察

① 世俗主義

世俗主義というのは、超自然とか啓示とかを全部否定していく、考え方のことです。何でも自然の論理で片づけていく。お袋の知恵とか、お婆さんの知恵といっても、つきつめてみると、損をしないようにどう生きるかにつきます。合理的基準だけでものごとを切って捨てるのです。自然の論理ですべてを図っていく、この世界の論理で全部を動かしていく、これが世俗主義です。現代はこういう基準で動かされています。

ヨハネ・パウロ二世も**「現代はこの世俗主義に侵されていて、この世の論理でしか物事を見ないという世界観に、侵食されている。これに同調するか、これに立ち向かうか。このことが現代の一番大きな課題なのです」**ということを語っておられます。

私たちもそうなのです。いつの間にかそういう考え方に侵食されています。子どもは一番いい学校に、まさに学歴中心のものの見方になっているのです。信仰ということでも、自分に都合のよいことだけをとり入れる。会社に勤めたら競争社会の中で相手を蹴落としてまでも、出世を第一に考える。国際社会も弱者切捨ての論理が支配しているのです。そういうことが当然だと考える、これが現代なのです。

また、今まで延々と積み上げてきたものを、コンピューターが一瞬のうちに片づけてしまう。マネーゲームで会社をのっとっていく、長い間技術を磨いてものを作っていた人たちはのけものにされてしまう。まさにこういう考え方が現代を支配していて、教会であっても抵抗ができないのです。

現代は神とか、聖書の人生観とか人間観を一切切り捨ててかかっているのです。こんな社会に向かって私たちはどうすればいいのでしょう。こういう現代社会を理解する努力を教会はしなければならないことは確かです。オウム返しのようにキリストの教えだけを伝えてもダメなのです。現代社会で大切なメッセージを確な方法で、伝える努力をしなければなりません。

私は教育の畑を歩いてきましたので、教育ということに非常に興味があります。関連の月刊雑誌なども必ず全部に目を通し、必要なところは切り抜いています。新聞も読むべきところをきちんと読んで、理解しているつもりです。それから私の伝えるメッセージを自分に問いかけながら、日曜日の説教を準備しないといけないなと自分に言いきかせています。

そこで、仙台教区から高松教区に移り、新しい教区で、教区民が司教を理解していただき、教区民の一致を促進するために、毎週インターネットを通して、私の説教は必ず流すようにしました。私の話すことは、インターネットに載るので、よく言葉を選んで準備して話さなければなりません。そのためには、必ず、現代社会へのメッセージを考慮したものを置くようにしています。

高松教区では広報委員会の協力により、私が行った説教集が出版されました。教区の人たちがそれを読んで司教の考えを理解してもらい、言いたいことを分かってもらうよう努めています。

混沌として根無し草みたいなこういう社会だからこそ、損得しか

考えないという社会であるからこそ、私たちキリスト者は確かなメッセージを一人ひとりが持っていなければなりません。

今までは神父様が話をして、信徒は聞いていればいい時代でしたが、もう、それは通じなくなっています。今や一人ひとりが自分のメッセージをきちんととらえて、現代社会にどのように伝えていくかということを考えなければならない時に来ています。幸いにインターネットがありますし、携帯電話がありますし、いろんなメディアなど広報手段はいろいろあります。

あとは伝えるべきメッセージを持っている人を増やすことです。神父様だけがメッセージを伝える人ではなくて、ここにいる100人、200人の一人ひとりがメッセージを伝えていく時代になったら、社会は変わるのではないでしょうか。

では、伝えるべきメッセージとは何でしょう。

②自然教の問題点

自然教というのは、人間は自然の生活で十分だという考え方で、啓示を必要とせず、神さまを必要としないのです。教会も必要としません。

教会も必要でないと考える信者さんたちが多くなっています。その信者さんたちに、教会、教会と言うだけでは通用しなくなっているとも言えます。教会に来る信徒数を増やすという考えの前に、本当の人生を生きていく価値観とか、教えとかをほんとうに理解する人を増やす方向に教会は向かっていかなければならないのではないでしょうか。

マス（大勢の人を一括りして）を掴んでマスを求めるのではなく、一つひとつ、一人ひとりをどのように掴むか、ということを考える教会のあり方を少し模索しなければならないと考えております。

東大の先生で戦後の日本の思想界をリードした人に、丸山真男という人がいます。少し、左翼がかっていまして、日本の教育界を左に向けた人ですが彼はこういうことを言っています。

「日本で受け入れられない2つのことがある。それは、共産主義とキリスト教だ。日本の社会の中で両者は右と左。完全に思想的には対立しているけれども、自分の守備範囲を守らないということでは全く同様で、日本文化にとっては異質である。共産主義は日本の土壌を下から崩して、新しい土壌を造ろうとする。これは日本の体質に合わない。

同じようにキリスト教はよそから入ってきて、日本の土壌をかき乱していく。一つの真理しかないという捕らえ方をする。これも日本の土壌に合わない。何か、異質のものを感じさせている。だから、どんなに日本にこの2つが入ってきても、日本の土壌の中で決して市民権を持てないであろう」

どう頑張ってもキリスト教は日本に根付かないというのです。みなさんはどう思われますか。先ほど申しましたように、一人ひとりが背骨をもった確固たる信念を持つこと。弱い立場の人、貧しい人を大事にすること。私の力ではなく、神の力への絶対的信仰があること。一人ひとりがこういう信念を持ち、一つひとつ本当に自分のものとして、それを源泉として発言できるようになることが求められている時代なのです。

それから、もうひとつキリスト教が日本という土壌に深く浸透していくためには、信仰と同時に深い愛が必要です。人に対しての深い思いやり、人を揺り動かしていくような暖かさ、この2つの面が一つになることです。そこに、初めてキリスト教が日本という土壌の中にゆっくりと入っていく素地が作られていくのではないでしょうか。

頭だけのキリスト教から、心のキリスト教に切り替えなければならない。情だけで生きているキリスト教から、きちんと一本筋の入った知的なキリスト教が必要です。

このテーマは長崎で話をするのに丁度、いい題材ではないかと思いました。長崎の信仰は自然のまま生まれそのまま自然に育っていると思われますが、もう一度、自分の信仰とは何であるかを考え、背骨を一本きちんと見つけていってくださればいいなと思います。自分が受けている信仰の基本は何であるかということをもう一度見直して欲しいと思っています。

そして、それは自分の周りにいる信者ではない人、あるいは社会の人にきちんと伝わる、自分の言

葉で表現できるまでに成熟しないといけない。頭ばかり、口ばかりの信仰でなくて、人に対して何よりも深い思いやりのある信仰、この2つが合わさって、日本の土壌にキリスト教が根付き大きく前進していくのではないかという気がします。

私は日本の教会の中で一番小さな、一番貧しい教区におります。人もいない、お金もない、ほとんどお年寄りで、信者の数もほとんどいない、キリスト教的な施設もほとんどない。ないないづくしですね。でも、あるのです。それは、何もないところから作っていってくださる神さまがしてくださるという信仰心です。一番貧しいから、何にもないから、一番大きな恵みを神さまはくださると信じています。だから、「しかない」と言わないで、「こんなにもある」という発想法をしたら変わるかなという気がしています。

仙台教区の事例から・・・

仙台教区にSという小さな教会が青森にあります。そこは10数人の信者さんがいて、一番下の方が68歳、あとは、70、80歳のお年寄りばかりでした。冬の寒い雪の降る日にストーブを囲みながら話しをしたことがあります。

「司教さま私たちは教区費を払えない。この教会を維持するのがやっとです。それもここ数年でできなくなります」と、嘆き節だったのです。私は「大丈夫だよ、教区費は払わなくていいから、よくここまで教会を守ってくれたね、ありがとう」と言いました。そして**「人間の目で見ても分からない、神さまがどうしてくださるか、分からないので忍耐して事の成り行きを見て行きましょう。教会をすぐに閉めることはしないで見て行きましょう」**と付け加えたのです。

そして、私が仙台にいた4年間にある先生の家族が2家族と、葬儀屋さんの家族も入ってきて、子どもが何と10数人になりました。大人も30代、40代の人が入ってきて10数人が増えてきたのです。

仙台教区から別れるときに、4年前のことは覚えているね。何もないと言ったけど、今いっぱいあるよね。神さまの考えは私たちの頭とは違うんだよ、と言ったことを懐かしく思い出しております。

仙台教区に行った最初の月に仙台市の八木山教会が火事で焼けました。これが、仙台教区での私の最初の試練でした。信者さんたちは、すぐ教会を建て直そう、というのです。カリスに頼んで火災保険を使って教会を建てて欲しい。日本全国に教会が焼けたからと募金をすれば何とかなるというのです。私はストップをかけました。まず、教会とは何かを考えてから建物を考えたい。教会とは何かを考えないで、建物だけを建てるのには私は反対です、と言いました。ずい分文句を言われ、何回つるし上げを食らったことでしょう。しかし、決して私は譲りませんでした。

教会とは何かを、毎月二回話し合い、毎月一回はミサをして、ミサの中で一緒に祈りました。一年間、教会とは何かを考え、教会とはこういうものだ、こういう教会を私たちは作りたいというコンセンサスをもらうまでにいきました。不要のものをつけず質素に。自分たちの背丈に合ったものをつくる。

若者を育てる教会、典礼を大事にする教会、聖歌をきちんと歌う教会、じっくり話し合う教会を求めました。そこの教会の神父はこういうやり方に反対しました。私は強権を発動し、彼に転勤していただき、そこは司祭不在にしたのです。信者さんたちだけがいる教会にしました。こうして、他の人からお金をもらってではなく、自分たちの背丈に合った教会を作ることに成功したのです。

今、仙台市内でおそらく毎年一番洗礼が多いのは、その教会だと思います。教会学校が一番盛んなのはその教会です。信者さんたちが必ず、自分の仲間を連れてくるので、教会学校を通して、必ず洗礼が毎年あります。何か考えさせてくれると思います。そして今、私はこの教会をとても誇りに思っていますし、また自分は間違っていなかったと心底から思っています。

上位下達で、司教がこういうから何でも「ハイ」というのでは時代に合いません。なにも司教に反対しろと言っているのではありません。神父がこういうから「ハイ」だけではだめでしょう。**本当の教会とは何か、現代社会にどう適用すればいいのか、どういうふうにフィットするのか。これを真剣に考えていくことから始めていかなければならないと思います。**

聖書豆知識

Q. **前回のお話で、聖書が正典性を考慮しながら、まとめられていったことについては理解できました。しかし例えば旧約聖書は具体的にどのような書によって、形成されるようになったのですか。またそれは、カトリックもプロテスタントも同じなのですか。**

A. 直接この問いに答える前に、一つ重要な点を述べておかなければなりません。それは、聖書がなぜ「聖なる書物」と呼ばれるのかという点です。簡潔に答えるならば、聖書は人間の働きによってのみ書かれた書物ではなく、神の霊である聖霊が人間に働き、双方の協働によって書かれた書物だからです。この霊の働きのことを、特に私たちは「霊感」と呼んでいます。たとえ神の言葉であっても、もし人間が理解できなければ、人間にとっては何の意味もありません。だから人間の働きかけが、どうしても必要になってきます。人間が理解できる言葉で、しかも人間の手を通して書かれてはいるけれども、著者たちがこの霊感を受けているからこそ、彼らによって書かれた書物は聖書と呼ばれるに値するのです。それでは、神の霊と人間の間にはどのような相互関係があるのかと問われるかもしれませんが、答えにかなりの紙面を割きますので、差し控えておきます。このように霊感を受けて人間によって書かれた書が、前回述べた「正典」として考えられてきたのです。

しかし、どの書が正典で、どの書が正典ではないのか判別するのは大変難しいことでした。そこで大まかではありますが、これからこの点について話を進めてゆきましょう。

まずユダヤ人たちがそれをいかに理解していたか、述べなければなりません。シラ書の序言の部分を読むと分かるのですが、ユダヤ人たちは正典を三部構成で考えていたようです。つまり「律法」、「預言者の書」そして「その他の書」です。その分類は以下の通りです。

- **律法…** 創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記
- **預言者の書…** ヨシュア記、士師記、サムエル記(上・下)、列王記(上・下)、イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、12小預言書
- **その他の書…** 詩編、ヨブ記、箴言、ルツ記、雅歌、コヘレト書、哀歌、エステル記、ダニエル書、エズラ記、ネヘミア記、歴代誌(上・下)

ご覧のようにユダヤ教においては、これら39書をもって旧約の正典としています。これは「プロトカノン」と呼ばれ、いわば正典目録の原形にあたるリストです。実はプロテスタントではユダヤ教と同様に、分類の仕方は異なるにしても、この39書をもって正典としています。ではカトリックではどうなのかということになるのですが、39書はもちろんのこと、さらに別に7書を加えて正典としているのです。その7書とは、トビト記、ユディト記、知恵の書、シラ書、バルク書、マカバイ記(上・下)です(これらは新共同訳聖書では、「続編」のところに収められています)。従ってカトリックにおいては、46書をもって旧約の正典を構成していることになります。

そこで恐らく皆さんは、何故カトリックとプロテスタントの間に違いがあるのかと問われることでしょう。**プロテスタントの方では、ユダヤ教と同様に、ヘブライ語で書かれた聖書を正典の規範としているからであり、それに比べてカトリックでは、ラテン語訳の聖書である「ヴルガタ」をその規範とし、その中にはギリシア語が原典とされる7つの書が含まれているからなのです**(シラ書も原典はギリシア語と考えられていましたが、しかし、ヘブライ語で書かれたものが死海近辺で見つかり、驚きを与えました)。だから、何を規範として考えているか異なっているため、双方の間に違いがあるということになるわけです。

最後にカトリックにおいては、私たちは39書を「第一正典」と呼び、7書を「第二正典」と呼んでいることのみ記しておきましょう。

(湯浅　俊治)

Catholic Archdiocese NAGASAKI

「長崎さるく博」

「長崎さるく博」という一風変わった博覧会が、去る2006年4月1日(土)から始まり、10月29日(日)まで行われる。そこで、今回はその紹介をします。

◆「長崎さるく博」とは何ですか・・・

日本ではじめての「まち歩き博覧会」です。

鎖国の日本でただひとつ海外に開かれ、幕末の開国で西洋文化がどこより早く押し寄せたまちである長崎は、日本と中国と西洋の文化が今なお色濃く混在するまちといえます。

「さるく」とは、ぶらぶら歩くという長崎弁です。

つまり、**この長崎のまちをゆっくり歩いてみませんか?**というものです。

また、このさるく博は、パビリオンを建てて入場料を取るという、博覧会ではありません。それは、パビリオンに替わるものが、居留地・寺町・唐人屋敷・教会群・平和公園・浜町・新地・稲佐山・グラバー園・出島・博物館・美術館・外海・野母崎なのです。そこで、それらを楽しむ方法さえはっきりと提示できれば、観光客に長崎の都市観光を存分に楽しんでもらえるのではないか、と考え「長崎遊さるく」「長崎通(つう)さるく」「長崎学さるく」というコースが作られています。自分の興味や関心に合わせて選び、楽しみながら、学びながら、長崎のまちの魅力を存分に味わって欲しい、といった企画なのです。

◆「さるく博」に長崎教区では何かやっていないのですか・・

「長崎さるく博」タイアップイベントとして「**市民セミナリヨ2006—長崎の宗教と文化—**」をアジェンダNOVAながさきの主催、国宝・大浦天主堂(カトリック長崎大司教区)の共催で行っています。

「長崎のまちを、さるき」、「講話を聞き」、「音楽を楽しむ」という三部構成の7回シリーズです。

第一部の「ミニさるく」では、講演テーマに合わせた場所を案内人付きで歩きます。

二部・三部は国宝の大浦天主堂を会場に行われ、第二部では「神と仏と人間と」という大きなテーマでキリスト教や諸宗(神道・仏教)の方々が長崎の街で織りなしてきたその融合の文化について共に考えるということで、講演が行われます。

第三部の「音楽の夕べ」では、この一連のテーマに合わせた音楽を楽しんでいただいています。

これまで4回行われましたが、毎回大勢の参加者があることは、長崎市民の関心が高いことを表わしているように思われます。

◆さるくコースで、何か珍しいものを紹介してください。

「新地・唐人屋敷界隈」というコースがあるので紹介しましょう。

長崎に住んでいた中国の人たちは、元禄時代前まで市内に散在していましたが、やがて、密輸やキリスト教浸透の恐れがあるという理由で、この唐人屋敷に住まわせたのです。

出島の2倍以上の広さの敷地内に長屋が20棟立ち並び、周囲を煉塀で囲み、さらにその周りを竹矢来で囲い、入口には番所が設けられ、無用の出入りを検査しました。船載貨物は新地蔵に預けられ、中国の人たちは手回り品のみで帰帆まで館内で生活したそうです。

現在もなお、4つの建物が再建されていますが、その中に、「天后聖母」を祀って建立されている「天后堂」というのがあります。

天后聖母

新地にある天后堂

「元文元年(1736年)、南京地方の人々が航海安全を祈願し、天后聖母を祀って建立。寛政2年修復。現在の建物は、明治39(1906)年、全国の華僑の寄付で建てられました。閑帝も祀っているので、別名「閑帝堂」とも呼ばれています。・・・・・」

(さるくコースマップ説明より抜粋)

小教区・地区・教区 評議会について

高見大司教が提唱する**「参加し」「交わり」「宣教する」**というスローガンは、教会の本来のすがたを探し求める長い旅路の途上に掲げられた標識ともいうべきものです。そして、それはあの教会の地殻変動とも言うべき、第二バチカン公会議という源泉から、流れ出てきたものでもあります。

その本来のすがたをいくらかでも具体化しようとして、4年近い期間をかけて、評議会組織が出来上がりました。それが、小教区・地区・教区評議会です。

なお、この組織編成作業は歴史上はじめて手がけられたものではなく、とくに小教区評議会については、今から30数年前1973年、里脇浅次郎枢機卿時代に始められたものでもあります。

ですから、今回は単なる改編作業ということになります。

一、全員参加・全員交流の車軸としての役割

車輪は車軸を中心として、全体が回転します。この車軸がピシッと中心に座り、ぶれることがなければ、車輪全体がどんなに激しく回転しても狂いを生じることはありません。

反対に、その車軸の位置が真ん中ではなく、少しでもずれていたり不安定になると、全体の回転に大きな支障をきたします。時には壊れてしまうこともあり得ます。

評議会は、いわば車軸の役割を果たすことになります。小教区・地区・教区それぞれに区分けされて、様々な役割を持つメンバーの全員が参加し、交わるための中心的役割を引き受けるものだからです。

教会のさまざまな役割が、つながりと力を得て勢いよく回転するかどうか、評議会の姿勢にかかっています。

二、垣根を保ちつつ、垣根を越える

今回の組織再編成の特徴は、信徒・修道者・司祭が同じ土俵に上るというところにあります。これまではどちらかというと、それぞれの組織内で動き、その垣根を越えた交わりが必ずしも機能していたとは言えないところがありました。

たとえば、小教区や地区を代表して信徒が教区レベルの会合に出席し、重要事項を話し合っても、小教区や地区に帰ると、その重要事項は小教区や地区全体の取り組み事項にならない、ということも事実としてあったわけです。

これからはたとえ信徒の方が代表者として派遣されても、それは主任司祭、及び、地区長の代わりとなりますから、おのずから派遣元の全体とつながることになります。

三、垣根越えの延長としての宣教

この、評議会組織という参加交流の管を通して、互いの垣根越え運動が回転しはじめると、それは自然の勢いとして、教会と社会という垣根を越える回転へと広がりを見せることになるでしょう。

これはもはや「宣教」という、教会がその本性として担っている、基本行為の展開ということになります。

9年後の2015年、長崎教区は、その歴史的復活事件ともいうべき「信徒発見」から150年という節目を迎えます。

この評議会組織が車軸としての役割を遺憾なく発揮し、教区の本来のすがたを見出すための信徒発見ならぬ、「教区発見」の旅を力強く推進していくための母体となることを期待したいものです。

生活の中の教会

丸尾教会　　フォトプラン　山本 富夫

昭和後期

有川湾に臨む小高い丘の上に建つ教会堂。上空からの眺望は、信仰、生活、自然の融合美を醸し出している。

この地への移住は一八〇〇年頃に始まった。その後、家御堂を建て、信仰を受け継いだ。

一九〇〇年代に入って、青砂ヶ浦教会の大崎師は、丸尾郷の丘に白い教会堂を建立し、巡回した。

その後、信徒が増え、新たに敷地を求め、一九七二年九月、現教会堂を建立。司祭館を新築し、献堂から三年、小教区として独立した。

信仰は、しっかりと根を下ろし、郷の生活に溶け込んでいる。